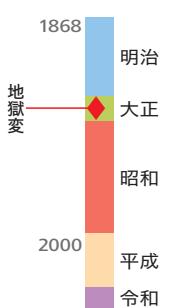


地獄変

芥川龍之介



火はみるみるうちに、車蓋^{やかた}を包みました。ひさしについた紫のふさが、あおられたようにさつとなびくと、その下からもうもうと夜目にも白い煙が渦を巻いて、あるいはすだれ、あるいは袖、あるいは棟^{むね}の金物が、一時に碎けて飛んだかと思うほど、火の粉が雨のように舞い上がる——そのすさまじさといったらございません。いや、それよりもめらめらと舌を吐いて袖格子にからみながら、半空までも立ち昇る烈々とした炎の色は、まるで日輪が地上に落ちて、天火がほとばしったようだとでも申しましようか。前に危うく叫ぼうとした私も、今は全く魂を消して、ただ茫然と口を開きながら、この恐ろしい光景を見守るより外はございませんでした。しかし親の良秀は——

良秀のその時の顔つきは、今でも私は忘れません。思わず知ら

ず車の方へ駆け寄ろうとしたあの男は、火が燃え上ると同時に、足を止めて、やはり手を差し伸ばしたまま、食い入るばかりの目つきをして、車を包む焰煙^{えんえん}を吸いつけられたように眺めておりました。が、満身に浴びた火の光で、しわだらけな醜い顔は、ひげの先までもよく見えます。が、その大きく見開いた目の中といい、引き歪めた唇のあたりといい、あるいはまた絶えず引きつっている頬の肉の震えといい、良秀の心にこもごも往来する恐れと悲しみと驚きとは、歴々と顔に描かれました。首をはねられる前の盜人でも、ないしは十王の庁へ引き出された、十逆五惡の罪人でも、ああまで苦しそうな顔をいたしますまい。これにはさすがにあの強力の侍でさえ、思わず色を変えて、恐る恐る大殿様のお顔を仰ぎました。

が、大殿様は固く唇をおかみになりながら、時々気味悪くお笑いになつて、目も離さずじつと車の方をお見つめになつていらつ

ござります。ただ美しい火炎の色と、その中に苦しむ女人の姿とが、限りなく心を悦ばせる——そういう景色に見えました。

しゃいます。そうしてその車の中には——ああ、私はその時、その車にどんな娘の姿を眺めたか、それを詳しく申し上げる勇気は、とうていろいろとも思われません。あの煙にむせんであおむけた顔の白さ、炎を払つて振り乱れた髪の長さ、それからまた見るまに火と変わっていく、桜の唐衣^{からぎぬ}の美しさ、——なんというむごたらしい景色でございましたろう。ことに夜風が一下ろしして、煙が向こうへなびいた時、赤い上に金粉をまいたような、炎の中から浮き上がり、髪を口にかみながら、いましめの鎖も切れるばかり身もだえをしたありさまは、地獄の業苦を目の当たりへ写し

出たかと疑われて、私はじめ強力の侍までおのずと身の毛がよだちました。

(中略)

ござります。たゞ美しい火炎の色と、その中に苦しむ女人の姿とが、限りなく心を悦ばせる——そういう景色に見えました。

しかも不思議なのは、なにもあの男が一人娘の断末魔をうれしそうに眺めていた、そればかりではございません。その時の良秀には、なぜか人間とは思われない、夢に見る獅子王^{ししおう}の怒りに似た、怪しげな厳かさがございました。でござりますから不意の火の手に驚いて、鳴き騒ぎながら飛び回る数の知れない夜鳥でさえ、気のせいか良秀の揉烏帽子^{もみえぼし}の周りへは、近づかなかつたようでござります。

その火の柱を前にして、凝り固まつたように立つてゐる良秀は、——なんという不思議なことでございましょう。あのさつきまで地獄の責苦に悩んでいたような良秀は、今はいよいよのない輝きを、さながら恍惚とした法悦の輝きを、しわだらけな満面に浮かべながら、大殿様の御前も忘れたのか、両腕をしつかり胸に組んで、たたずんでゐるではございませんか。それがどうもあの男の目の中には、娘のもだえ死ぬありさまが映つていないので